陵墓関係調査概要

昭和四八年度に陵墓の営繕工事を施工した箇所について、陵墓の遺構、遺物及びその他の包蔵文化財の在否を知るために調査を行ったうち、次の事項に関する調査の概要を記す。

（事前調査）

一　仲哀天皇陵前藤井寺部事務所の改築（大阪府藤井寺市藤井寺四丁目）

二　白鳥陵外堤の護岸（大阪府羽曳野市軽里三丁目）

三　後鳥羽天皇・順徳天皇大原陵倉庫の新設（京都市左京区大原勝林院町）

四　近衛天皇陵貯水槽の設置（京都市伏見区竹田内畑町）

五　景行天皇陵墳丘前方部の護岸（奈良県天理市渋谷町）

（立会調査）

六　仁徳天皇陵の野犬防止柵の設置（大阪府堺市大仙町）

七　景行天皇陵渡土手の樋管改修（奈良県天理市渋谷町）

八　後嵯峨天皇陵貯水槽の拡張（京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町）

九　後白河天皇陵築地塀の改修（京都市東山区三十三間堂廻り町）

（委託調査）

一〇　鳥羽天皇陵防災の配管工事（京都市伏見区竹田内畑町）

近衛天皇陵内に設置した貯水槽から隣接する当陵に送水するため配管を行ったが、当所は鳥羽離宮跡に含まれているので、その調査を鳥羽離宮跡調査研究所の近畿大学教授杉山信三氏に委嘱した。

調査は、委託調査を除いては、当部陵墓調査室と夫々所管の監区職員が、工事の設計、実施は、京都事務所工務課がこれにあたった。

景行天皇・白鳥陵の遺構、遺物の鑑定は書陵部委員末永雅雄氏に、地質、地層の鑑定は奈良教育大学教授梅田甲子郎氏に、工法の技術指導は建設省土木研究所砂防部長枸杞芳彦氏に委嘱した。又近衛天皇陵の調査は杉山教授と、鳥羽離宮跡調査研究所の峯巍氏の協力を得、出土品中陶磁器の鑑定は東京国立博物館陶磁室長林屋晴三氏にお願いした。

なお、白鳥陵外堤及び景行天皇陵墳丘の護岸箇所については、工事前の地形を記録するために、夫々、株式会社南海コンサルタント、日本工事測量株式会社に測量させて百分の一の地形図を作製した。

一　仲哀天皇陵前藤井寺部事務所改築敷地の調査

当事務所の改築に当り、昭和四八年九月二六日から四日間、改築工事の削掘予定箇所について、発掘調査を実施した。

当所は、仲哀天皇陵正面外堤上小土堤の、拝所の東側に隣接する部分で、旧事務所撤去跡地とその接続地である。発掘区域は、この外堤に平

行する間口六・六五メートル、奥行三・三メートルの東西に長い矩形地区の外郭線の内外各四〇センチ幅と、この矩形地区をほぼ中央で南北に二分する幅八〇センチの事務所基礎部分、及びこれの東に隣接した間口一・五メートル、奥行二・五メートルの浄化槽設置の矩形地区である。発掘は、事務所基礎部分は深さ約八〇センチ(標高三六・二〇メートル)、浄化槽設置部分は深さ約一・九メートル(標高三五・五六メートル)まで実施したが、葺石や、樹立した埴輪などの原初の遺構と認められるものは検出出来なかった。事務所部分の土相は最下部は塊状の黄褐色粘質土に砂を交えた堆積層で、埴輪片、陶器片、瓦片などを含み、層の上面は、旧事務所の基礎で攪乱されて、かなり凹凸がある。この層の上方は三〇～四〇センチの厚さで、二乃至三層の攪乱層になっている。浄化槽設置部分の土相は、上から腐植質表土・粗い砂まじりの黄灰色粘質土・黄灰色砂質土・黄褐色砂質粘土・褐色塊状粘土・固くしまった灰褐色粘質土の順に六層に分かれ、最下層の粘質土層の上面は、標高が南側三六・二一メートル、北側三五・八メートルと堤法面のように勾配がある。又この層の上面に近い処に、埴輪片のまとまっている箇所があった。他の各層も、埴輪片などの遺物を含んでおり、事務所部分と同様盛土である。後日の参道集水桝設置工事の際、拝所西側で、外堤土小土堤裾末端の地下六〇センチ(標高三六・二二メートル)から、径約三九センチ、高さ基底部まで一六センチの樹立した埴輪円筒(第7図写真)が出土して、設計変更をした事から考えると、この最下層は、原初の堤体と認めてよいかも知れない。

出土遺物は、堀に近い北側よりも南側の方が密度が高く、その大部分が埴輪円筒の破片である。埴輪破片は、表面の摩滅した軟質のものが多いが、硬質のもの及び須恵質のものもある。原況を留める埴輪片では、概して凸帯は扁平で粗雑、表面の調整は、所謂刷毛目を、縦方向の後で、雑に横方向に施したものがある。

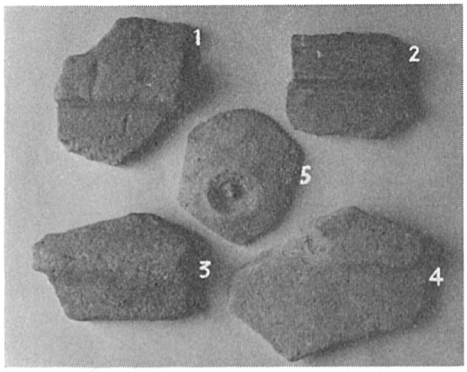
他に土師器片、須恵器片、陶器片、瓦片が少数出土した。瓦片は、表面に砂粒が附着している小片で、鎌倉時代のものとする意見もある。

以上のように現状保存を要する遺構がなかったので、予定通り事務所を建設した。

(石田茂輔)

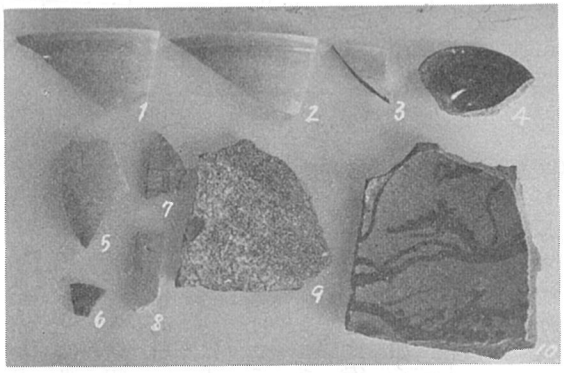
二　白鳥陵外堤護岸区域の調査

白鳥陵は羽曳野丘陵の北端に近い丘陵の東縁に位置し、長軸一九〇メートルの西面する前方後円墳である。外堤が経年の浸蝕によって崩壊の恐れがあるので、昭和四八年末より護岸工事が行われることとなり、一〇月二二日より一〇日間に亘って事前調査を実施した。工事を行った箇所は、外堤西側の南寄りと、南側全面の延長三四〇メートルの地域である。調査に際しては、護岸の基礎を設置する予定の外堤法面の直下から堀側に長さ三・二メートル～五・七メートル、幅一・五メートルのトレンチを八箇所に設定して掘削を行った(第1図)。掘削の深さは約一メートルである。このトレンチによって得られた地質上の所見を略述する

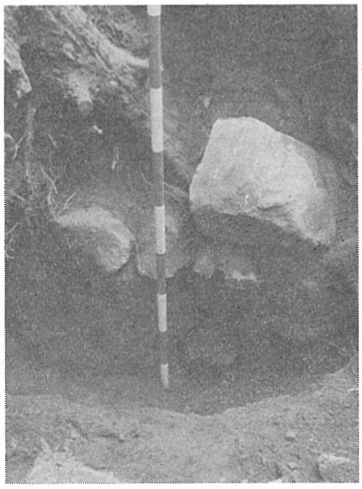


第８図　白鳥陵外堤出土品

第７図　仲哀天皇陵参道埴輪出土状況

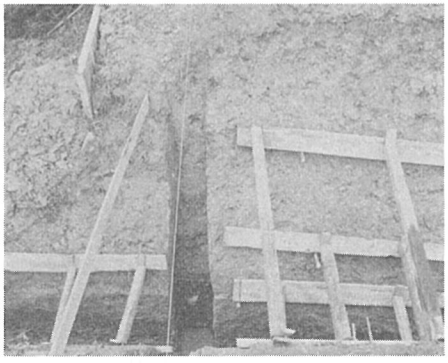


第10図　大原陵域内出土陶磁器破片



第９図　大原陵域内石組出土状況

第12図　右葺石部分



第11図　景行天皇陵渡土手葺石出土状況